

## ICM(脳と脊髄の障害に関する研究機関)との 20 年にわたるパートナーシップ



ICM(脳と脊髄の障害に関する研究機関)のメンバーであるリオネル・ナカッシュ教授、ジェラルド・サイアン教授、ジャン・トッドに囲まれるフランソワ・ポール・ジュルヌ。

2024年6月6日、パリ - F.P.ジュルヌはパリのブティックにおいて、パリのICM(脳と脊髄の障害に関する研究機関)との20年にわたるパートナーシップを祝いました。フランソワ・ポール・ジュルヌ、この機関の創設メンバー、コレクターたちが集い、20年にわたる神経科学の研究への支援を記念します。

2004年、ジェラルド・サイアン教授とジャン・トッドは、世界中から脳科学の多様な分野における専門家を集め、基礎研究から臨床研究まで行う機関を創設することを決めました。彼らのビジョンにインスパイアされたフランソワ・ポール・ジュルヌは、躊躇うことなくこの新たな構想を支援することを選び、それ以来 F.P.ジュルヌは、この機関の最も長く存続する民間の現行パートナーとなりました。

2008年に設立したICMは、構想、組織の両面において革新的な研究所です。患者、医師、研究者、実業家をひとつの拠点に集め、可能な限り最善の期間で患者たちに提供するために、神経系疾患に向けた治療法の迅速な開発を実現することを目的としています。欧州の中でも有数の神経学センターに数えられるピティエ=サルペトリエール病院の中に設けられ、ICMはわずか15年で世界における代表的な機関となりました。11の最先端テクノロジー・プラットフォーム、臨床研究所、訓練センター、スタートアップ起業支援センターを含むこの拠点には、900名もの国際的な専門家が働いています。

### 20年のパートナーシップ – 重要な出来事

数々の重要な段階が双方の繋がりを強めただけでなく、多額の基金を集めることに貢献しました。

オークションへのユニークピース提供、特定のモデルの売上利益からの寄付、様々なプロジェクトの資金提供により、F.P.ジュルヌは ICM とその使命のために、長期的な取り組みを明確にしました。

**2004年** :オークションハウス「アンティコルム」の 30 周年を記念し、F.P.ジュルヌは「ヴァガボンダージュ」と名付けられた 3 つのユニークピースを製作しました。フランス人コレクターのジャン・オーブが提案したこの名は、時を捕らえ保持する窓が文字盤の周りを旅し、分を表示する放浪の様子を表現するために選ばれました。これら 3 つのモデルは、ホワイト、イエロー、ローズゴールドで発表され、それぞれが 1 つの年代として 10 年間を象徴しています。真鍮製のムーブメントが搭載されたこれらの時計は、210,450 スイスフランで販売され、全額が ICM に寄付されました。

この機会にフランソワ-ポール・ジュルヌは、スクーデリア・フェラーリのディレクター兼この機関の共同創設者でもあるジャン・トッドと出会いました。同じ情熱を共有する彼らは、モーターレースの世界における、理想的なクロノグラフについて語り合いました。

**2008年** :フランソワ-ポール・ジュルヌは、1/100 秒の単位まで計測可能な「サンティグラフ」を発表しました。独創的なムーブメントを搭載したこの時計は、時計製造の伝統と革新を融合させるというフランソワ-ポール・ジュルヌの哲学を象徴しています。»

同年、このモデルはジュネーブ時計グランプリにて、名誉ある「金の針賞」を受賞しました。

脳と脊髄の疾患と戦う研究所に感銘を受けたフランソワ-ポール・ジュルヌは、ジャン・トッドが発起人として名を連ねるこの研究所へ新しいクロノグラフを通して支援をすることを決断しました。

「サンティグラフ」の販売を通じて 30%の利益が、期限を設けず ICM に寄付されます。2008年 6月 18日、創設メンバーとフランソワ-ポール・ジュルヌが見守る中、建物の最初の礎石が象徴として配されました。

**2016年** : ICM のロゴが 12 時位置に控えめに添えられた、ブルーのマザーオブパール文字盤を備えたユニークピース「サンティグラフ・スヴラン」は、パリのコンシェルジュリーで開催されたチャリティー・パーティーにてオークションに出品されました。この時計は 120,000 ユーロで落札され、その全額がこの機関に寄付されました。

**2021年** : F.P.ジュルヌは、“Big Brain Theory”（ビッグ・ブレイン理論）プログラムのために、2年間追加の資金援助をすることをコミットしました。この革新的な計画は多様な学問分野からの専門家たち同士の協力を促進すると共に斬新なアイデアを開拓し、新しい治療の領域を押し広げることを目的としています。このプロジェクトは中枢神経系を冒す複数の硬化症、自己免疫疾患に苦しむ患者たちのための研究に注力しています。この支援の恩恵を受け研究者たちは、他の神経障害にも適用できる、有望な新しいテクノロジーを開発しています。

「F.P.ジュルヌの時計のように、人間の脳はきわめて複雑で高度な構造です。その損傷を予防し、同時に修復をするためには、その機構を徹底的に理解しなければなりません。ICM の最も長く存続する民間の現行パートナーとして、F.P.ジュルヌは当機関の科学と人類に関する冒険に大きく貢献しています。脳障害の発見と治療について研究する私たちの使命を支援し、その熱意を F.P.ジュルヌの顧客に語り伝えてくださる F.P.ジュルヌのスタッフに心から感謝いたします。私たちは一丸となって、世界的な脳障害との戦いにおける前進に努めています。」

ジェラルド・サイアン教授、ICM 所長

## 将来を見据えて - 2024-2026 年の期間で提携を強化

既存のプロジェクトに加え F.P.ジュルヌと ICM は、エンジニアの雇用と最先端設備の購入を通して 2024-2026 年の期間でより高度な研究と能力を高めるために、研究開発部門(現在 RnD Unit F.P.ジュルヌと呼ばれています)を支援する新たなパートナーシップを発表します。

27 の研究チームとともに、この機関は研究開発部門を基盤とし、革新的なテクノロジーの解決策を生み出すことを目指します。2022年の設置以来、50のプロジェクトを推進し、その多くが既に重要な成果を遂げ、神経外科用の装置と診断ツールの発明は特筆すべき快挙です。この支援のおかげで、この部門は発展を加速し、研究者、臨床医、スタートアップの拡大する需要に対応します。このパートナーシップは、プロトタイプを共有し、革新と世界中の科学者たちが恩恵を受ける知識の拡散を推進することで、オープンソースを強化します。

高齢化社会において、まもなく世界人口の 8 人に 1 人以上が脳障害を患うでしょう。F.P.ジュルヌと ICM は、これらの疾患を理解し、治療し、治すための共通の追求に向って協力し続けることを光榮に思います。

## F.P.ジュルヌの支援の成果

資金の 1/3 が民間の慈善団体・個人から提供されるこの機関にとって、F.P.ジュルヌのサポートは極めて重要であり、このサポートにより次のことを可能にしています：

- 最適な環境を提供し、46 か国からの科学者たちを魅了する。この資金提供により、研究者たちはより大胆な研究を試み、分野を横断した協力を行うことで、より柔軟に野心的なアイデアを開拓する。
- NovaSeq X Plus sequencer（ノヴァセック X プラス・シーケンサー）など、最新のテクノロジーに投資続けることで、迅速で正確な遺伝子研究を可能にする。2023 年、このツールにより遺伝子配列速度を高め、国際プロジェクトへの参加を強化することで、この機関は新たな重要な段階に到達する。
- この機関の起業支援センターは、現在 26 のスタートアップを抱え、新たな治療法の開発を加速する。これにより、起業家たちは医師、患者、研究者たちと緊密に連携しながら、新しい治療法を開発することができる。

## 主要な科学的快挙

ICM の創設以来、次のような重要な科学的な前進が達成されました：

- **2023 年**、アルツハイマー型認知症における APP（アミロイド前駆体）タンパク質の役割を発見により、胎児発達段階でのこのプロテインへのわずかな変調が、その後の人生でこの疾患への抵抗力を弱くすることが明らかになりました。
- **2021 年**、パーキンソン病に関連した震えを治療するために、超音波ニューロモデュレーションを使用する、新たな治療法のアプローチが承認されました。この方法は脳深部刺激療法より患部切開が少なく、震え（特に上肢）の軽減を助けます
- **2020 年**、“Genetics and Development of Nervous System Tumors”（神経系腫瘍の遺伝学と発達）の研究チームは特定の神経膠腫において遺伝子変異変化を特定し、これらの腫瘍の化学療法に対して耐性を持つようにしました。このことにより再発時により個別で最適な治療を可能にしました。
- **2020 年**、“Structural Dynamics of Networks”（ネットワークの組織的な活動力）チームは、初めて脳血管系の完全なマッピングを開発し、神経変性や神経精神障害の研究において新たな機会を切り開きました。
- **2014 年**、てんかん患者の個々に合わせた遠隔診断と監視システムは、機械学習とビッグデータ・アルゴリズムを用いて開発されました。スマート・ウェアラブルを使ったこのシステムは、頻繁な通院の必要性を軽減し、今日国際的な規模の会社に成長した Bioserenity（バイオセレンティ）スタートアップの設立に繋がりました。